# 風の旅

四季抄

星野富弘 著

四季抄

# 風の旅

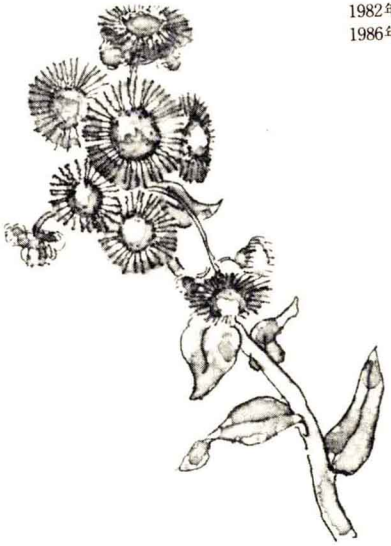
立風書房

四季抄
# 風の旅

著者　星野富弘
住所　〒376-03 群馬県勢多郡東村神戸四六五
発行者　下野博
発行所　株式会社立風書房
住所　〒141 東京都品川区東五反田三の六の十八
電話　(〇三)四四七—一一九一
振替　東京五—七四四九三
印刷所　図書印刷株式会社
ブックデザイン　水野一寿(株イッセイ)
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

四季抄　風の旅

1982年1月10日　第1刷発行
1986年6月30日　第59刷発行
定価 1,000円



四季抄

# 風の旅

星野富弘 著

# はじめに

口の筆を通して遠い地へ旅立てることを、うれしく思っています。

今、私の前には冬の山が連なっています。木の葉の落ちた山が、リスの尻尾のように暖かい色をしているのは、寒い私達に対する自然の配慮かもしれません。

私は少年の頃、この山をちょっぴり憎んでいました。父母のように土にまみれ、狭い畑をかきまわしながら送る山の生活が、堪えられなかったのです。お金や地位など、一見しあわせそうに見えるものが、山の向こうにあるように思っていたのかもしれません。

「いつか‥‥、きっといつか‥‥」

なんて思いながら、山を見上げていたのをおぼえています。その「いつか」が、とんでもない方法でやって来たのは、大学を卒業した年の六月でした。

昭和四十五年、勤務先の学校の体育館での一瞬の出来事でした。

宙返りに失敗して、倒れている私を、生徒達は、いつものようにふざけているのだと思ったそうです。

過去の苦しみが後になって楽しく思い出せるように、人の心には仕掛けがしてあるようです。

九年間の病院生活をふり返ってみても、つらかったことより、友人や看護婦さん達の、励ましの言葉の方が、淋しかったことより、生徒達の大変明るい手紙の方が、病室の天井

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

より、窓べで一生懸命咲いていた花の方が、目にうかぶのです。死にたいと思ったことより、「生きろ！」と教えてくれた母や聖書の言葉の方が、強く残っているのです。

今、私の前には少年の頃見上げた山と変わらない山があります。

曲がった小道と、山すその畑で石のように働く人々のいる、ふるさとがあります。車椅子の輪の影が虹のように大きくのびる頃になると、遠くの小学校からオルゴールが流れ、夕陽が、山も木も私も同じように染めながら沈んでゆきます。

夜があるから朝がまぶしいように、失った時、初めてその価値に気づくことがよくあります。何げなく動かしていた指、あたりまえのように歩いた足…。しかし、目に見えるものよりも、もっともっと大切なものがありました。

もしかしたら、失うということと、与えられるということとは、となり同士なのかもしれません。

私の「いつか…」は、少年の頃夢みたような出世や、地位との出会いではありませんでした。自分の力だけで生きていると錯覚(さっかく)していた、小さな私と、大きな愛との出会いだったのです。

そしてそれは、何ものにも代えられないすばらしい出会いだと思っています。

**星野富弘**

目次

## 第一章　折れた菜の花


さくら 8
くちなし 9
しょうぶ 10
はなきりん 11
なのはな 12
さつき 13
らん 14
すかしゆり 15
あいりす 16
つれづれ記 17

## 第二章　花に寄せて


ふきのとう 26
たんぽぽ 27
しおん 28
どくだみ 29
ひなげし 30
てっせん 31
なしのはな 32
まむしぐさ 33
らん 34
きく 35
つばき 36
つばき 37
ばら 38
きく 39
なずな 40
つれづれ記 41

## 第二章　風の跡


さざんか 50
れんげつつじ 51
れんぎょう 52
むらさきつゆくさ 53
つゆくさ 54
がくあじさい 55
あさがお 56
ふうちょうそう 57
やぶかんぞう 58
ねこじゃらし 59
みょうが 60
きんもくせい 61
きく 62
つばき 63
たいさんぼく 64
つれづれ記 65

第一章

# 折れた菜の花

車椅子を押してもらって
桜の木の下まで行く
友人が枝を曲げると
私は満開の花の中に
埋ってしまった
湧き上ってくる感動を
おさえることができず
私は
口の周りに咲いていた
桜の花を
むしゃむしゃと
食べてしまった

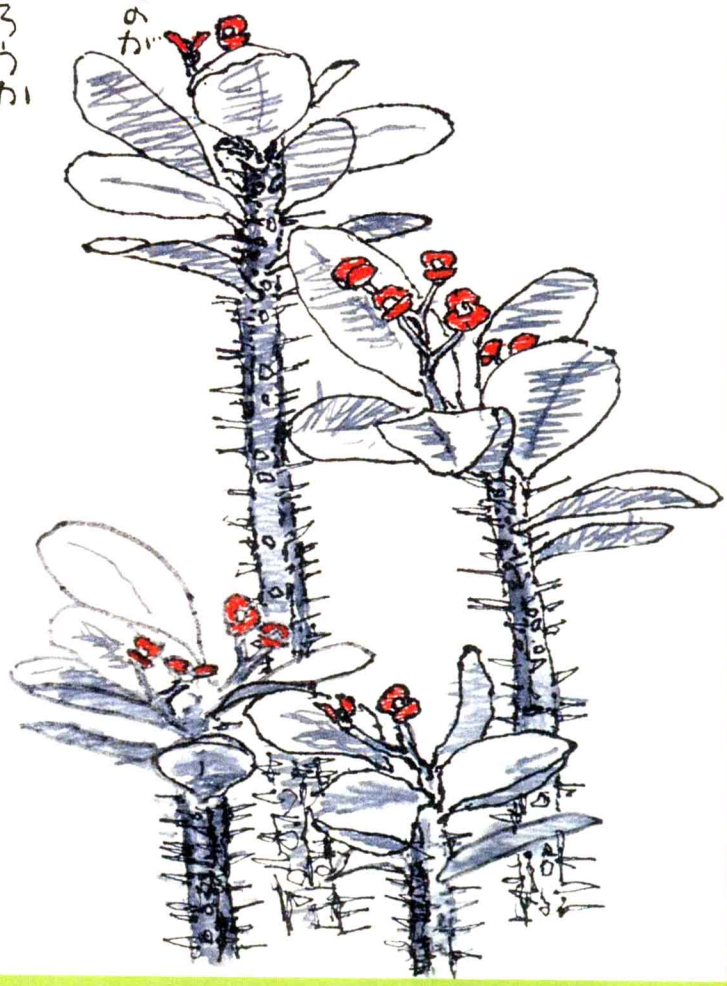
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

真白な服を着て
しとやかで
あなたが来ると
部屋中の人が うっとりする
看護婦さん あなたは
くちなしの花のような人です
私がいうと その人は
ひと声あげて とび出ていった
口の大きな看護婦さんだった

9 くちなし(1980)

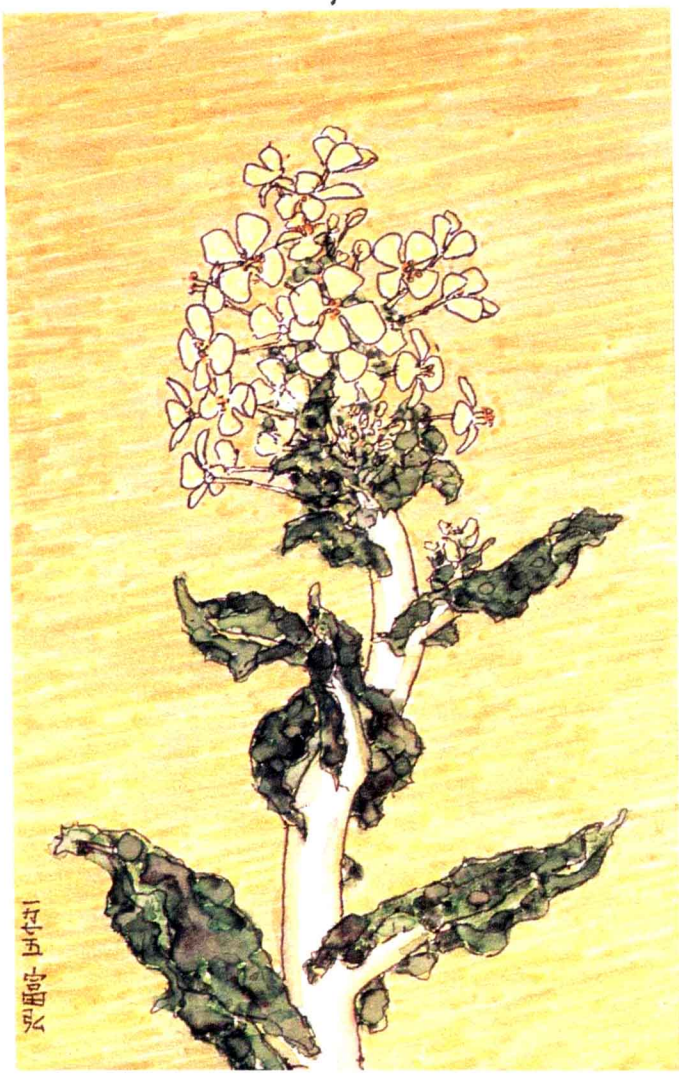
黒い土に根を張り
どぶ水を吸って
なぜきれいに咲けるのだろう
私は
大ぜいの人の愛のゆにいて
なぜみにくいことばかり
考えるのだろう

動ける人が
動かないでいるのには
忍耐が必要だ
私のように 動けないものが
動けないでいるのに
忍耐など 必要だろうか
そう気づいた時
私の体をギリギリに縛りつけていた
忍耐という 棘のはえた縄が
"フッ"と解けたような気がした

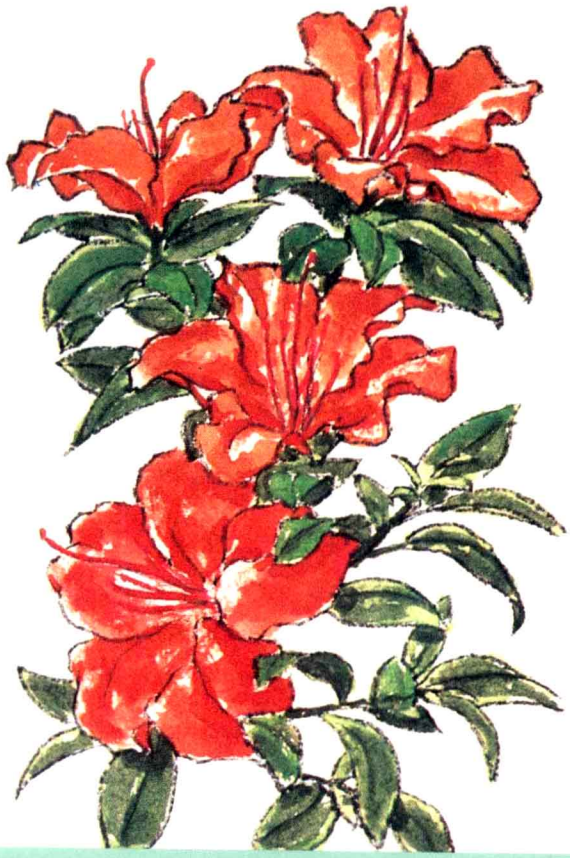


11　はなきりん(1974)

私の首のように
茎が簡単に折れてしまった
しかし菜の花はそこから芽を出し
花を咲かせた
私もこの花と
同じ水を飲んでいる
同じ光を
受けている
強い茎になろう



私の指の間に
さつきの花を
はさんでくれたっけね
それから君は
自分の裁縫くつひもにも
同じ花をさして
言葉ではなかったけれど
「頑張ろう」って言ったっけね
元気かい
あの時の赤い花が咲いているよ



私の未熟な筆では
この花の千分の一の美しさも
描き出すことは できない
しかし 私はこの花をいつまでも心に
留めておきたい
苦労して育てた花を
根元からスッパリ切って 私にくれた
Nさんの気持ちとともに いつまでも
心の中に咲かせておきたい

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com